

令和 4 年 5 月 27 日現在

機関番号：34419

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00596

研究課題名（和文）中国江蘇省通州方言における入声舒声化傾向の調査研究 入声消滅原理の解明を目指して

研究課題名（英文）A study of Ru tone laxation tendency on Jiangsu Tongzhou dialects in China

研究代表者

大西 博子（ONSHI, HIROKO）

近畿大学・経済学部・教授

研究者番号：60351574

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：中国語には、かつて入声と呼ばれる声調があった。しかし、現代中国語には、一部の方言を除いて、すでに消滅してしまっている。通州は、江蘇省南通市に位置する市轄区。南方方言の呉語と北方方言の江淮官話とが交接する地域で、入声が消滅していく過渡的な段階が観察できる。本研究は、こうした現象をテーマに、現地の方言調査で得られた録音データの音響音声学的分析を通して、舒声化の分布状況と進行パターンを明らかにした。その結果、通州方言においては、入声音節の長音化が舒声化を促す最大の要因であることがわかった。しかし、長音化の進度には、地理的差異や年齢的差異がみられ、長音化を促す要因についての解明は課題となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

入声舒声化に関する研究は、北方官話方言の中で唯一入声という声調を保持している江淮官話の研究者の中で盛んに行われてきた。本研究が対象とする通州方言は、呉語と江淮官話とが交接する地域に分布するため、周辺の江淮官話で発生している舒声化ほど進化していないものの、すでにその傾向は十分に観察できる。本研究において、舒声化傾向（つまり舒声化の初期段階）の発生パターンや発生メカニズムが明らかになったことで、江淮官話における入声舒声化の発生要因を裏付けるデータが提供できた。このことにより、官話方言（現代中国語）における入声のより早期の姿が再構築でき、入声がなぜ消滅したのか、その謎に一步迫ることができたと考える。

研究成果の概要（英文）：In Chinese, there was a tone called Ru. However, in modern Chinese, it has already disappeared except for some dialects. Tongzhou is located in Nantong city, Jiangsu province. Its dialects are distributed in the area where the "Wu" dialect (it belongs to southern dialect in China) and Jianghuai mandarin dialect (it belongs to northern dialect in China) intersect, and we can observe a phase in which the Ru tone is disappearing. This study takes "the tendency of Ru tone relaxation" as the theme and clarifies the distribution and pattern of Ru tone relaxation through the acoustic phonetic analysis of the recorded data investigated by the local dialect. The results show that the lengthening of the Ru syllables is the biggest reason to make the Ru tone close to the non-Ru tone. However, there are geographical and age differences in the progress of variable length syllables. The clarification of the main reasons for promoting length syllables has become a next subject.

研究分野：中国語方言学

キーワード：江蘇省 通州方言 入声 舒声化 呉語 江淮官話

### 1. 研究開始当初の背景

中国語は、声調 (Tone) 言語である。声調は、中古音の四声 (平声・上声・去声・入声) を陰陽 2 類に分ける四声八調で分類される。現代中国語の共通語 (普通話) は、平声が陰陽に分かれた陰平と陽平、そして上声と去声の四つの声調を有するが、入声は存在しない。

この入声とは、音節末子音が内破音 [-p, -t, -k] で構成され、短く詰まって発音される音節を調類としたものをいう。中古音では、明確にこの音素を有していたとされるが、現在では、北方方言の一部と南方方言に残存するのみで、官話方言では、江淮官話 (こうわいかんわ) を除いて、入声という声調は、すでに失われている。

官話 (Mandarin) の入声消滅は、14 世紀頃に遡るとされるが、今日、官話の中で江淮官話にのみ入声が保持されていることから、江淮官話の入声は、官話方言における入声消滅の謎を解き明かす鍵とされ、多くの研究者の注目を集めてきた。江淮官話に属する南通方言に関しても、早くから調査研究が行われてきた。

しかし、従来の方言研究は、大都市や地域の中心地を対象とすることが常道であったため、郊外や農村地域に関する調査は手薄であった。『南通地区方言研究』(文献 1) は、南通地区 61 地点を調査した貴重な記録で、38 項目の言語形式を地図上に表現し、方言区画を目的とした研究であるが、残念ながら入声の舒声化現象については、言及されていない。

2016 年 8 月、『南通地区方言研究』で空白地点となっていた二甲という町 (鎮) を調査し、上海や蘇州といった周辺の呉語地域にも、また境界を接する南通や泰州といった江淮官話地域にもみられない現象 入声の声門閉鎖が弱化し、調値が舒声調にかなり接近している、が分布することを知り得た (文献 2)。こうした入声舒声化傾向は、二甲に隣接する通州の中心街 (金沙) にも分布するが (文献 3)、二甲の舒声化は金沙と異なり、入声の陰陽二類の声調のうち、陰入調の舒声化が進んでいる (文献 4)。つまり通州方言には、入声舒声化の発生パターンに少なくとも 2 つの異なる類型があると言える。

ここで、入声音節の変遷過程を説明しておこう。中国語の入声は、図 2 に示したように、音節末子音の内破音 [-p, -t, -k] が声門閉鎖音となり (段階 I) それが舒声化し (段階 II) 他の声調に合流 (段階 III) という過程をたどったとされる。現代呉語では、入声音節は声門閉鎖となっていることから 段階 I にあり、江淮官話では、舒声化した入声は他の声調へと合流する過程が観察できることから 段階 II にある。通州方言は、声門閉鎖の弱化から舒声になろうとしている段階 (III) にあり、まさに入声消滅過程の中間段階にある。

興味深いことに、通州方言とよく似た現象は、通州から 300 km ほど離れた安徽省南部の馬鞍山市 (図 1) にも分布する (文献 5)。よって、通州方言における実態調査を進めていくことで、他の方言における入声の進化過程も検証でき、現代中国語で失われた入声の消滅原理を知る有力な手がかりが得られるのではないかと考える。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、通州方言における入声の舒声化傾向をテーマに、その発生のプロセスと要因を解明し、入声消滅の原理を追究することである。600 年前に官話で消滅した入声は、官話方言の中で唯一入声を保持している江淮官話にその謎を解き明かす鍵があると考えられてきたが、通州方言にこそ、その謎に迫る有力な手がかりがあると考えられる。本研究の成果から、現代中国語で失われた入声の初期の姿を再構築し、入声消滅原理を知る新たな知見が得られることを目指す。

### 3. 研究の方法

研究の方法は、現地における方言調査で得られた録音データの音響音声学的分析と文献資料での比較分析に基づく。

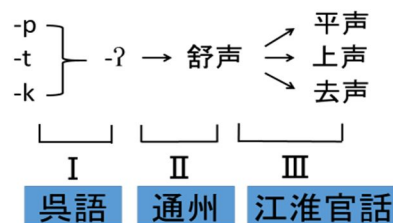
従来の入声研究は、音韻論からのアプローチが主流で、入声韻尾の弱化や脱落といった入声音節内部の音韻変化に重きが置かれ、方言間の比較調査でもって考察が進められてきた。また、声調研究に関しては、調査者の聴覚印象に基づいた記述調査がメインであり、今世紀に入ってから、音響音声学的な手法による調査研究も盛んになってきたが、それらの多くは、従来の入声研究の分析結果を検証することが第一の目的とされ、入声舒声化に関する新たな知見を得るためのものではなかった。

よって、本研究では、入声の長音化や調値の舒声接近といった声調変化に重きを置き、方言間



図1. 通州所在地

図2. 入声音節の変遷過程



の比較分析に音響音声学的分析を加えながら、入声舒声化の変遷過程を科学的な手法で考察することに努めた。

#### 4. 研究成果

##### (1) 単字調における入声舒声化の進行プロセス

本研究では、まずは単音節で発話される際の声調(単字調)の入声舒声化について、音響音声学的な手法を用いて、その進行プロセスを分析した。その結果、通州における入声舒声化は、入声音節の長音化に始まり、舒声調値の接近を経て、入声調と舒声調との持続時間差を縮めながら、舒声調合流へ向かうというプロセスで進行していることが確認できた。また、入声の陰陽二類で舒声化が同時に進行するのではなく、陰入と陽入どちらか一方の声調から舒声化が始まり、その進行速度には地域差が生じていることも確認できた(文献、 )。

##### (2) 呉語における入声舒声化の進行プロセス

呉語における入声舒声化について、文献資料(方言調査記録)を用いて、俯瞰的な視点からその共時的状況を観察し、先行研究(通州方言)で得られた結果の普遍性について確認した。それと同時に、方言間の比較分析を通して、舒声化の進行プロセスの地域差についても考察した。その結果、通州方言における入声舒声化の進行プロセスは、北部呉語と共通性が見られるものの、特異性(入声陰陽二類のうち、陰入調の舒声化が加速している)もあり、江淮官話との関連性も含まれていることがわかった。また、舒声化の進行プロセスは呉語内部でも地域差が見られ、舒声化の進行段階や入声調値の動向は、地点ごとに異なることも明らかになった(文献 )。

##### (3) 双字調における入声の連続変調システム

呉語の声調は、単独(単音節)で読まれるか、単語(複音節)で読まれるか、音節構造の違いによって異なる実現形態を取る。本研究では、金沙の老年層と若年層の代表者2名の録音データを基に、音響音声学的分析により、複音節で発話される際の声調(双字調)における入声の連続変調システムについて考察した。その結果、双字調において、調値では入声と舒声との合流の動きは見られないが、入声と舒声との時間差は縮まる傾向にあり、特に入声と去声とが組み合わせる語では、その傾向がより顕著に観察できた。つまり、双字調における入声は、入声音節が長音化し始めた段階(進行プロセスの第一段階)で、入声音節の長音化は、去声との差を縮めながら進行していくことも明らかになった。

#### <引用文献>

- 鮑明煒・王均主編、『南通地区方言研究』、江蘇教育出版社、2002  
大西博子、「江蘇二甲方言入声初探」、『呉語研究』第9輯、2018、14-20  
汪平、「江蘇通州方言音系探討」、『方言』第3期、2010、201-210  
大西博子、「二甲方言の単字調における音響音声学的分析」、『近畿大学教養・外国語教育センター紀要(外国語編)』第9巻第1号、2018、1-19  
袁丹、『基於実験分析的呉語語音変異研究』、復旦大学博士論文、2013  
大西博子、「江蘇通州方言における入声舒声化 金沙と二甲の比較分析」、『近畿大学教養・外国語教育センター紀要(外国語編)』第10巻第1号、2019、65-83  
大西博子、「南通金沙方言単字調中の入声」、『呉語研究』第10輯、2020、2-13  
大西博子、「呉語における入声舒声化 進行プロセスを中心に」、『近畿大学教養・外国語教育センター紀要(外国語編)』第11巻第2号、2020、87-110

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 大西博子	4. 巻 11
2. 論文標題 呉語における入声舒声化一進行プロセスを中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 近畿大学・外国語教育センター紀要（外国語編）	6. 最初と最後の頁 87-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大西博子	4. 巻 10
2. 論文標題 南通金沙方言単字調中の入声	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 第十屆國際吳方言學術研討會論文集「呉語研究」	6. 最初と最後の頁 2-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大西博子	4. 巻 第10巻
2. 論文標題 江蘇通州方言における入声舒声化 金沙と二甲の比較分析	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 近畿大学・外国語教育センター紀要（外国語編）	6. 最初と最後の頁 65-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 大西博子
2. 発表標題 江蘇通州方言入声調的演化方式
3. 学会等名 第11回演化言語学学会国際大会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大西博子
2. 発表標題 南通金沙方言単字調中の入声
3. 学会等名 第10回国際呉方言学会（国際学会）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関